

はじめに

患者が訴える数々の病症から病態を正しく把握するには、古典医学における五臓の生理作用（蔵象）が重要であることは、昨年学習したとおりである。

今年度は、「脾胃の病症と治療」を中心に話を進めるが、最初に、脾胃の生理作用につき簡単に復習する。

ここで、脾の生理ではなく、脾胃の生理作用と言ったのは、脾と胃は、他の肝・胆、心・小腸、肺・大腸、腎・膀胱の様なはっきりした陰陽関係になく、脾胃は一体となり水穀の精微を全身に輸布しているため、脾の病症を語るに胃腸の生理作用を抜きには説明出来ないのである。

1. 食物の消化・吸収・腐熟の過程

- ①「脾は中州」、「脾土は中央」と言うように、脾胃は、五臓の中央に位置し水穀を受け、それを運化してその精微を胃気として経絡を介して全身に送り出し、自分も含めて他の四蔵を養っている。したがって、胃は「水穀の海」、「五臓六腑の海」などと呼ばれ、後天の元気の源である。
- ②水穀は胃腸で消化吸收され、脾の運化作用により、精微物質（気血・津液・衛気・営気）として、経脈を介して全身に送り出す。
- ③余った水液は肺・腎三焦の気化作用により汗や尿として排泄される。
- ④この津液を巡らせたり汗や小便にして排泄する役目は陽気（衛気・営気）がする。
- ⑤この陽気が不足すると津液が滞って痰飲が発症する。
- ⑥これに内因・外因・不内外因など、各種の病因が加わり脾・胃・小腸・大腸を中心とした、種々の病症を引き起こす。

2. 脾胃の生理機能

- ①脾の生理機能
運化、昇清・統血を主る。
気血・津液製造の源である。
筋肉と四肢を主り、口に開闔する。
- ②胃の生理機能
和降作用（受納・腐熟・降濁）を主る。
歯齦は胃に属す。

3. 脾と胃の病態的特徴

- ①脾の昇清と胃の降濁。
脾は昇清を主る→栄養物を心・肺に送る。
胃は降濁を主る。→消化物を小腸に送る。泌別清濁により栄養物質を吸収して脾へ転輸する。
- ②脾病の特徴
陽気虚衰のため運化作用が失調し、痰飲による寒病発症。 昇清作用失調による頭重・目眩。 統血作用失調による出血病発症が見られる。
- ③胃病の特徴
受納機能や腐熟機能障害。胃気上逆による熱性病発症が特徴である。

4. 証決定の意義

どこで、なにが、なぜ、どうなったかを推理して、変動経絡を確定するのが証決定である。『変動経絡の確定』ここに、漢方鍼治療（経絡治療）の意義がある。

例えば、中医学や科学派鍼灸では経絡の走行や、難経一難で『十二経皆動脈有り、独り寸口を取りて、以て、五蔵六腑の死生吉凶を決する』と断言している脈診を軽く考えて、実

的病症と、穴性論を中心に治療を行っている様である。

漢方鍼治療では、どこの臓腑経絡が虚して、現在の病症が現れたかを古典医学の生理・病理と脈診により、変動経絡を導き出して補瀉を加えることで治療目的の大半が達成できる実に合理的な治療法である。

「病は陰陽で、治療は五行でと言われている様に病を陰陽・寒熱の観点より捕らえて証決定を行うと次の五つの証がなりたつ。

- ①脾虚証→体質的なもの。脾の生理作用（運化・昇清・統血）失調によるもので、外邪の影響が無いもの。
- ②脾虚陽虚証→寒湿の邪、思慮過度などで陽気が虚衰して寒病症を起こしているもの。
- ③脾虚陰虚証→熱邪や労倦により、津液が虚衰して熱証を現しているもの。
- ④脾虚陽明経（胃）実熱証→虚熱に陽明経の熱と湿邪が加わったもの→悪寒発熱をもって始まり、午後から熱が高くなる（潮熱）。
- ⑤脾虚肝実証→血熱、悪血によるもの。

I 脾虚証（運化・昇清・統血作用失調）

1. 病因

体質的に脾胃の働きが弱いもの。

飲食失調、肉体疲労、久病、激しい吐血、慢性の下痢などにより、脾の精気が虚損して起こる。

2. 病症

①運化作用失調による病症

腹脹・食欲減退・腸鳴・下痢・頻尿・帯下。消瘦・倦怠・脱力感・息切れ・黄疸・味覚異常…。

②昇清作用失調による病症

眩暈・精神疲労・内臓下垂・子宮下垂・脱肛…。

③統血作用失調による病症

貧血・皮下出血・鼻出血・血便・血尿・月経過多・不正出血・崩漏…。

II 脾虚陽虚証（寒邪・湿邪によるもの）

1. 病因

脾の精気（気機）虚が前提。

思慮過度による陽気の損傷。

体質として胃腸（表）が冷えやすい。

雨湿の邪、腹部を冷やす、冷飲食の過剰摂取。

誤治（寒涼な薬剤の過剰摂取）などで脾陽（胃腸も含む）を直接損傷したもの。

* 寒凝気滞→陽虚陰盛→脾腎陽虚証に移行する。

寒邪（陰邪）の性質は凝滞と収縮であるため陽気を破りやすい。

又、気血は温を好み寒を嫌う」と言う性質があり寒邪により気の流通が阻害されれば血脈も滞り冷え病症を主とした痙攣や痛みを起こす。

2. 病症

①寒・湿邪による病症

腹脹・腹満・食欲不振・腹痛・悪心・嘔吐・下痢・小便自利・帯下…。

身体が冷えて無汗・口唇は白・口中に清水が溢れ食後に清水が流れ出る。

* 帯下→人体の帯脈以下の部位をいう。主に婦人科疾患をさす。

水様で多量、経色は薄く無臭。

②湿邪が主となる病症

頭重・眩暈・口が粘る・

体重節痛・四肢厥冷無汗・小便不利・浮腫…。

口淡・黄疸…。

* これらは全て陽気不足と湿邪（痰飲）により発症する。

口が粘るのは湿邪の粘着性による。

③胃腸は冷えて胸に熱ある病症

腹痛・下痢・・気・食欲変動・夜間覚醒・口内炎・口角炎舌炎…。

* 胃腸が冷えて発熱している時に下すと胃腸はさらに冷えて熱は胸に停滞する。熱は表裏関係の小腸にも波及し腹痛を現す。

④脾虚腎虚になった病症

腹痛の無い下痢、五更泄瀉（鶏鳴下痢）・手足厥冷・精力減退・食欲はあるが食べれず・眩暈…。→真寒假熱。

3. 脈証

陽虚→沈・遅・細・弱

痰飲→沈・弦

4. 腹証

大腹・小腹部に軟弱で無力→陽虚、痰飲による→脾虚腎虚に移行する。

心下痞（巨闕から臍中に熱、痞硬、抵抗、圧痛が現れる）

5. 治療

基本→大陵・太白、又は、商丘・間使に衛気の補。

胸の熱には知熱灸。腹の冷えには臍上に知熱大灸。

Ⅲ脾虚陰虚証（津液不足による虚熱病症）

1. 病因

脾虚で筋肉に水が多い時に冷えた為に陽明経の発散が悪くなって起こる→湿病。

暴飲暴食（濃厚な味・飲酒など）、労働による四肢の疲れ・房事過度・思慮過度などによって、津液が虚損して虚熱により胃が利潤を失うことで発症する。

2. 病症

①胃腸の虚熱病症

腹満・腹痛を伴う下痢便秘・食欲不振・味覚異常・口渇・乾嘔・しゃっくり…。

慢性→全身の倦怠感・無気力・四肢の煩熱、関節炎…。

②胆の虚熱病症

黄疸・小便自利・便秘・食欲不振…。

③食積による病症

胃脘部の脹悶・疼痛、・気、呑酸、嘔吐、下痢・便秘…。

3. 脈証

浮・大・虚。

津液不足が進行→沈・弦

食積→滑・実。

4. 腹証

心下に抵抗、圧痛、痞硬

腹直筋が下腹部まで緊張している。

下腹は膨満していることもあるが按压すると全体に軟弱である。

食積、痰飲悪血の部位としては右腹は食積→痛みは強いが排便により軽くなる。中腹は痰飲→痛みは間欠的である。左腹は悪血→痛みは動かない。

5. 治療

基本→太白、大陵に営気の補法。 思慮過度→公孫、内関。
虚熱が多い→陰陵泉・曲沢。さらに津液不足が進行→大都・劳宮。
肺の熱→魚際、神門、靈道。

IV 脾虚陽明經（陽実）実熱証

1. 病因

急性熱病の時に太陽經や陽明經で発症した熱が胃腸を中心とした腑（肺も含む）に停滞して起こる。→太陰病（傷寒論）

外邪→陽經熱→陰經熱→蔵が充実→腑の熱→陽經熱というパターンである。

①陽明經の熱病症

悪寒発熱、関節疼痛（実腫）、腹滿・腹痛、（胃脘部の灼熱痛）、腹痛を伴う下痢・便秘、口渴、吞酸・雑、嘔吐、齒齦痛、齒槽膿漏、口臭、多汗、皮膚病（ウイルス性のいぼ）リュウマチ…。

* 胃熱による消化・腐熟作用の異常亢進により食べてもすぐに空腹になる。腹痛は食後に増強する。

②胃腸の熱病症

悪寒は少なく発熱が主、腹滿、便秘、小便自利、手足の多汗、譫語、食欲旺盛、高血圧、いびき…。

* 便秘→下痢すると熱が抜けて気持ちが良い。

③肺の熱病症

胸中煩躁、不眠、鼻出欠、呼吸困難、咳嗽、肺炎、リンパ腺炎、甲状腺炎…。

④心の熱病症

のぼせ、不眠、口内炎、口角炎、便秘、高血圧、動気・不整脈…。

* 真の熱は上焦や表である小腸の熱となる。

3. 脉証

陽明經の熱→浮・大・数・実、又は沈・細・数・実。

胃熱→沈・滑・数・実。

肺熱→弦・実・数。

4. 腹証

陽明經の熱→經病なので腹証はあまり参考にしない。

実熱→腹脹・腹滿→按圧により抵抗あり。

虚熱中脘部に抵抗や圧痛がある。

左右腹直筋が緊張している。

5. 治療

基本→大都・劳宮に営気の補。

三里・曲池・上巨虚・下巨虚に営気の補。

関節の熱→知熱灸。

肺の熱→靈道・通里・魚際の補。

V 脾虚肝実証

1. 病因

脾の精気や津液が虚して少陽經、胆、厥陰經、肝臓にかけて、気血が停滞・充満して諸病症を現す。

これには、急性熱実を現すものと、慢性化して、悪血による寒病症を現すものがある。

これを、池田先生は、脾虚寒実熱証（急性・慢性）と脾虚寒実悪血証に区分している。

熱実→脾の精気虚や、肝の精気虚が原因であるが発病すると肝の精気虚は消えて肝は熱実状態となり、脾は陰虚（津液不足となるものである）。

悪血→急性熱病の誤治や過度な服薬、交通事故、暴飲暴食、産後の熱病や月経時の発熱

により結実より悪血を形成したもの。気鬱が肝鬱となったものなど。

2. 病症

①急性実熱病症

往来寒熱（少陽病）、潮熱、頭痛（側頭部）食欲減退、便秘、腰痛、関節痛、月経時の発熱又は、発熱中の月経（熱入厥室）…。

* 月経→熱が無いと肝虚証と間違いやすいので脈証腹証などにより判断する。

往来寒熱・潮熱→脾虚陽明経実熱証から移行する。

陽明経→少陽経→胆→厥陰経→肝→熱実結実となる

2. 悪血による病症

更年期障害、自律神経失調症に伴う諸症状（頭痛、耳鳴、眩暈、肩こり、腰痛、のぼせ・動気、足腰の寒、鬱病、不安神経症、不妊症、月経痛・月経不順）…。

* 自覚的には寒を訴えるので肝虚陽虚証と間違いやすいので注意。

3. 脈証

基本→沈・しょく・細にして力有り。

血熱証→沈・弦・数・実。

悪血証→沈・遅・細・しょく・実。

4. 腹証

寒実→心下痞_𠄎、胸脇苦満

悪血→恥骨上部から左臍傍に抵抗と圧痛。右臍傍から腹部にかけては、水滯が現れる。

5. 治療

基本→太白・大陵の補

気鬱→内関、公孫の補。

少陽経の熱→陽輔・中渚に営気の補、熱が強ければ瀉。

厥陰経の熱→期門・交換・曲泉に営気の補、熱が強ければ瀉。

悪血→三陰交、曲泉、血海に営気の補（瀉）。

標治法→足三焦経及び肩甲骨内側の反応に営気の補。

小腹部の水滯を伴う悪血所見→灸頭針

刺絡→細絡に点状刺絡。局所の悪血性鈍麻に吸角。

おわりに

現代社会は、過度な衛生思想と、過剰な薬剤の摂取、農薬散布や温室栽培による野菜の摂取、ホルモン剤により育てた魚肉の摂取などにより、脾胃に与えるダメージは多大である。

脾胃は、五行では「土」に属している。肥沃な土壌から栄養価の高い野菜が育つように、人体においても正常な精微物質を補充するために脾胃の果たす役割は大きい。

大宇宙である自然と小宇宙である人体にも科学化や開発と言う名のもとに破壊活動が行われた結果がアトピー性皮膚炎や花粉症などかつて人類が経験しなかった疾病を引き起こす原因を作り出している。

鍼灸の科学化が叫ばれて久しい。しかし、鍼灸を科学化することは今後の研究により可能かもしれないが、科学を鍼灸に結び付けるのは容易ではない。

なぜなら科学は一定の条件のもとに成り立つものであり、常に変化している病態を対象に治療を行う鍼灸の科学化は不可能である。

鍼灸治療は常に流動的な「気」の概念を抜いては成立しないのである。

気血・津液論をベースに病態を把握し脈証にてそれを確認して、衛気営気の補瀉に結び付ける漢方は治療こそが今後の鍼灸をリードしていく治療術であると自負している。

以上

《参考・引用文献》

- 『臨床に生かす 古典の学び方』 池田政一著 医道の日本社
『臓腑経絡からみた薬方と鍼灸』 池田政一編著・監修 漢方陰陽会
『伝統鍼灸治療法』 池田政一著 医道の日本社
『日本鍼灸医学（経絡治療・基礎編）』 経絡治療学会編纂 経絡治療学会
『日本鍼灸医学（経絡治療・臨床編）』 経絡治療学会編纂 経絡治療学会
『やさしい中医学入門』 関口善太著 東洋学術出版社
『中医学の基礎』 平馬直樹・兵頭明・路京華・劉公望監修 東洋学術出版社
『中医診断学ノート』 内山恵子著 東洋学術出版社